



みんなで楽しくごみを拾い、ポイ捨てをなくす工夫も考えています。

仙台市若林区中央市民センターを拠点に活動する子どもたちのボランティアグループ「チャボ!」。さまざまな活動を行う中で、年に2回から3回ほど、若林区中央市民センターから近隣の小中学校周辺までのごみ拾いをしています。その活動をレポートするとともに、「チャボ!」の活動をサポートしている、同市民センター企画調整係長の沼田智幸さんに、子どもたちの様子を伺いました。

学校や学年の異なる友だちができる!

「チャボ!」が誕生したのは、平成24年の1月。管内の3つの小学校からボランティアに興味のある子どもたちを募り、9名でスタートしました。現在は人数も増えて37名が登録。南小泉小学校、大和小学校、遠見塚小学校の4年生から6年生、そして南小泉中学校と蒲町中学校の1年生から3年生までの仲間たちが、月2回程度、主に土曜日の午前中に活動しています。

「チャボ!」ができたばかりのころは、東日本大震災で被災した沿岸部でのがれき撤去なども行ってきました。徐々に復旧が進む中で、これからの活動内容をどうするのか、みんなで考えました。そこで、メンバーの中から「市民センター周辺のごみを拾ってはどうか」という意見が出され、最初のアレマ活動が行われました。それが平成25年12月。それから年間2回から3回のペースでアレマ活動が続けられています。

「通常は10人から15人くらいで、2.5kmから4kmのコースを1時間半ほどかけて、ごみを拾っています。集めたごみは分別して重さを測るので、競うようにしてメンバーたちはごみを拾っています。夢中になりすぎて歩道からはみ出さないように、必ず私たち職員が2名以上付き添って実施しているんですよ」と、「チャボ!」を担当して3年目になる沼田さんが教えてくれました。

「チャボ!」の特徴であり、良いところは中学生のメンバーが小学生をちゃんと見てくれていること。小学生たちも良きお姉さん、お兄さんと一つの活動を一緒にできることを「楽しい」と感じているようです。

「普段は接点のない、ほかの小学校の児童や中学生と交流できることも、子どもたちにとっては新鮮なようです。活動終了後に、必ず感想を聞くようにしているのですが、道行く地域の方々に『ご苦労さん』、『ありがとう』と声をかけてもらえるのがうれしいと言っています。また『何でこんなにたばこの吸い殻が落ちているんだろう』と怒っていたり、『ポイ捨てが減るように、ポスターを貼ったらどうか』といった意見まで出るんですよ」と話す沼田さんも、子どもたちの頼もしさに自然と笑顔になります。そんな沼田さんは、活動の様子や感想を「チャボ!通信」としてまとめ、毎月1回発行。若林区中央市民センターのホームページに掲載すると同時に、メンバーが通う学校にも届けて掲示してもらっています。



子どもたちの活動をサポートしている沼田係長



高齢者の方々に届くお弁当にメッセージを添える活動もしています。

自分たちのまちに役立つことがしたい。

アレマ活動のほかにも、「チャボ!」が続けている活動としては、高齢者の方々にNPOグループが届けているお弁当にそえるお手紙を書くことです。B5版の紙に学校や習い事でがんばっていること、それから季節に合わせて、寒い時期なら「カゼに気をつけてね」とか、夏は「水分をちゃんととってください」などとメッセージを書き、イラストをそえて原稿の完成です。沼田さんが色上質紙にコピーをとり、メンバーが色ぬりなどをして仕上げておおよそ200人の高齢者の方々に届けられるようにしています。また、被災地域で支援活動をしているグループと一緒に「ひまわりプロジェクト」に参加。初夏に沿岸地域の使われていない農地にひまわりの種をまいて、秋にその種を収穫するといった活動も行っています。

「子どもたちの中にも、これからも震災復興のお手伝いをしたいという気持ちがあるようですので、今後の活動内容について、きちんと子どもたちの意見を聞く機会を設けたいと思っています。また、新しいメンバーが入ってきてくれるとうれしいですね」と沼田さん。詳しい活動の様子は「チャボ!通信」に掲載されていますので、ぜひご覧になってみてください。

仙台市市民センターホームページ

<http://www.sendai-shimincenter.jp/index.html>

【「チャボ!」のごみ拾いスタイル】

ひと目で「チャボ!」とわかるように、真っ赤なビブスを着ています。

おそろいの真っ赤なビブスには、発足当時のメンバーの中学生がつくった「チャボ!」のキャラクターマークのワッペンがついています。このビブスを着て、手には火ばさみとごみ袋。これが「チャボ!」のごみ拾いスタイルです。

